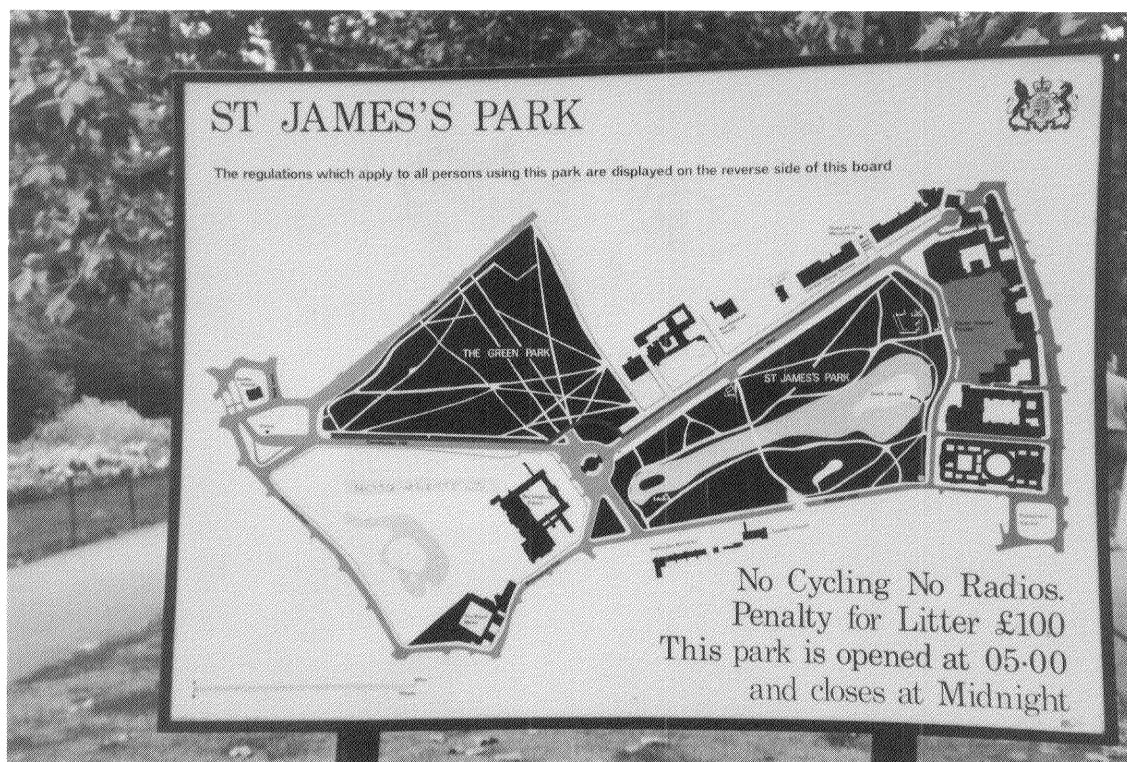


2. ロイヤル・パーク（王立公園）

ロンドン中心部に存在するもっとも広大な公園は、ロイヤル・パークである。こうしたロイヤル・パークはグレーター・ロンドン内に10あり、その総面積は2200ヘクタールにのぼっている。いうまでもなく、ロイヤル・パークは、王家や政府の公式行事に利用されるのみならず、ロンドンの住民やロンドンを訪れる観光客にも開放されている。以下、それぞれのロイヤル・パークに関して、概略を説明しよう。

表1 ロイヤル・パーク

	面積（ヘクタール）
セント・ジェームズ・パーク St James's Park	35
グリーン・パーク The Green Park	21
ハイド・パーク Hyde Park	139
ケンジントン・ガーデン Kensington Gardens	116
リージェント・パーク The Regent's Park	139
プライムローズ・ヒル Primrose Hill	23
グリニッジ・パーク Greenwich Park	79
ハンプトン・コート Hampton Court	268
リッチモンド・パーク Richmond Park	955
ブッシー・パーク Bushy Park	440
その他の小公園	11
合計	2,226



セント・ジェームズ・パークとその標識

●セント・ジェームズ・パークとグリーンパーク

バッキンガム・パレスに接するセント・ジェームズ・パークは、ヘンリーⅧ世がセント・ジェームズ・パレスを建設した際に、それまで多くが沼地でハンセン氏病患者の病院があった地域を一掃して、鹿の生息できる林に変えた。その後、チャールズⅡ世の時代に池が作られ、公園としてロンドン市民に開放された。更にその後、1828年に建築家ジョン・ナッシュが公園を作り替え、今日の姿になった。多くの花壇があり、四季それぞれの草花が公園を飾っている。池とその中にあるダック・アイランドには多くの水鳥が群がり、華やいだ雰囲気醸し出している。

バッキンガム・パレスからトラファルガー・スクエアに通じるザ・メルと呼ばれる遊歩道（ジェームズⅡ世がペルメル球技をするために拡張した）をはさんで、セント・ジェームズ・パークの西に広がるグリーン・パークは、閑静な公園であり、春には水仙とクロッカスが咲き乱れ、セント・ジェームズ・パークの華やかな美しさとは異なり、散歩あるいは読書、あるいは日光浴を楽しむ人々が集まっている。



グリーン・パークで憩うロンドン市民や観光客

●ハイド・パークとケンジントン・ガーデン

グリーン・パークの西に広がるハイド・パークとケンジントン・ガーデンは、合わせて250ヘクタールに及び、17世紀に新たに市街地として開発されたウェスト・エンドの全面積を上回っている。1630年台の半ばに住民に開放されたが、それ以前は王家の狩猟区であったため、数少ない住民にはむしろ広すぎ、決闘が行われたり、盗賊の徘徊する森として有名になってしまった。チャールズⅡ世は、犯罪の抑制を目的として樹木を伐採

したため、今日のような広々としたオープン・スペースへと外観が変えられた。しかし、マープル・アーチにあったタイバーン処刑場での処刑を見るために人々が群がり、あるいは政治集会が行われるようになってしまった。スピーカーズ・コーナーはその名残であるといえる。

17世紀の末に、ハイド・パークからケンジントン・ガーデンが分離され、その際、公園内に道路とサーペンタイン湖が作られた。この湖は、ケンジントン・ガーデン側がロング・ウォーターと呼ばれており、多くの水鳥が生息し、サンクチュアリーとなっている。ケンジントン・ガーデンはハイド・パークと趣を異にし、整備された花壇や多くの銅像がある。公園の西側に、セント・ポール寺院の設計者として著名なクリストファー・レンによるケンジントン・パレスがある。

●リージェント・パークとプリムローズ・ヒル

リージェント・パーク付近は、チャールズI世の時代には、国王の狩猟林であったが、革命に成功したクロムウェルによって樹木が伐採され、木材を売却して戦費の調達に当てられた。その後もこの地区の荒廃が進んだが、19世紀になってジョン・ナッシュが当時の皇太子リージェント公（後のジョージIV世）の依頼で公園に作り替えられた。アウター・サークルに囲まれたリージェント・パークの一角には、ロンドン動物園や野外劇場があり、インナー・サークルの内側はバラやチューリップの咲き乱れるクイーン・メアリー・ガーデンとなっている。



リージェント・パーク内にある野外音楽場

リージェント・パークの北側にはプリムローズ・ヒルが続いている。ここもかつては狩猟林であったが、1842年にガス灯がつけられ、ローヤル・パークとしての体裁を備えるに至った。丘の頂上からはロンドンの中心街が一望できる。



プリムローズ・ヒル

●グリニッジ・パーク

シティの南東約5キロに17世紀のグリニッジ・パークが残っている。チューダー王家の時代は、多くのローヤル・パークと同様に狩猟林であったが、その後スチュアート王家によって建設された住居あるいは海軍施設がある。チャールズII世は、ルイ14世の庭師に依頼してフランス風の庭園を作らせた。丘の上にはグリニッジ標準時で有名な王立天文台があり、現在は博物館となっている。公園の東側の一角には、約5ヘクタールの野生保存区があり、野生の草花が維持され、鹿も生息している。また公園の北側には、ローヤル・パークの中では最大の子供用プレイ・グラウンドがある。

●リッチモンド・パーク

リッチモンド・パークは、ハイド・パークとケンジントン・ガーデンを合わせた4倍の広さを有する公園であり、ローヤル・パークの中では最大の面積を有している。公園の中には、かつてイングランド南部のあちこちに存在した自然林が現在でも維持されている。チャールズI世の時代は狩猟林であり、歴代の国王が狩猟を好んだため、現在でも準野生の鹿が生息している。鹿は、かつてのような狩猟の対象ではないため、大変人に慣れており、観光客にサンドウィッチをねだる鹿もいる。



準野生の鹿が生息するリッチモンド・パーク

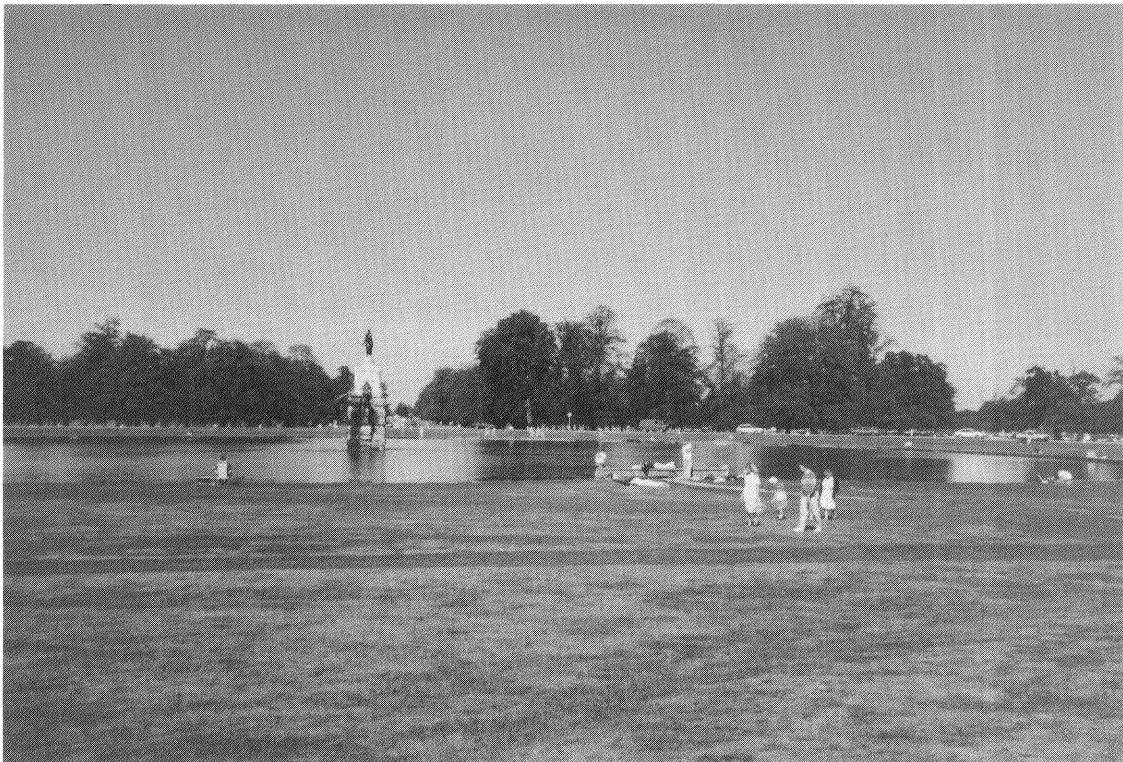
●ハンプトン・コートとブッシー・パーク

テムズ川の上流に位置するハンプトン・コートは、ヘンリーVIII世の時代にウォズリー枢機卿によって建設されたが、彼はその贅沢な邸宅を国王に進呈することによって自らの没落を回避しようとした。しかしその意図は成功せず、投獄され、それ以来歴代国王の好む宮殿として利用されてきた。その後、ウィリアムIII世の時代に、クリストファー・レンによって宮殿の改修が行われ、フランスのベルサイユ宮殿を真似た庭園が作られ、ほぼ現在の姿になった。公園内にある有名な迷路は、ウィリアムIII世の妻メアリーが亡くなった時に作られたものである。当時の陸上交通は貧弱であり、ロンドンとの交通はテムズ川を利用して船で行われた。現在でも遊覧船が運行されている。

ハンプトン・コートの北側には、ブッシー・パークが続いている。公園の南側入り口にはダイアナ・ファウンテンがあり、レンの設計によるチェスナット・アベニューとライム並木の交差するところとなっている。公園の多くはその名の通り自然のままに維持されている。



ハンプトン・コートの正面

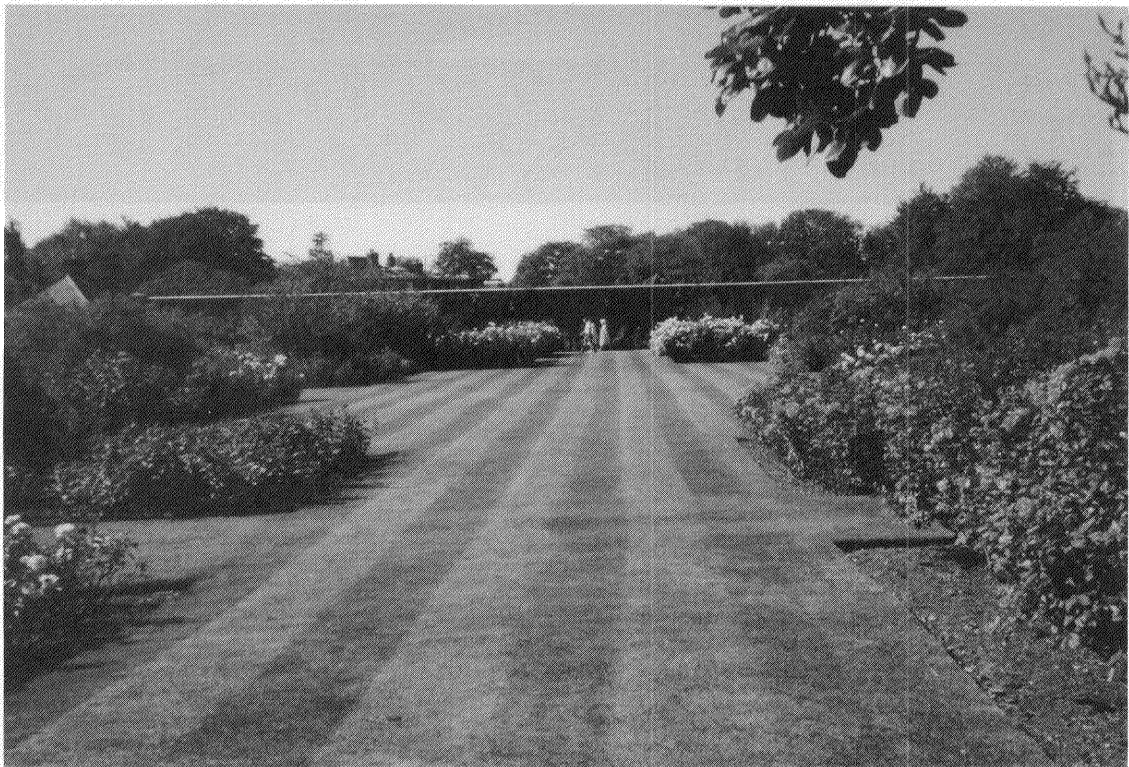


ブッシー・パークのダイアナ池

【ローヤル・パークの管理】

ローヤル・パークの面積は、合計2226ヘクタールに及んでいるが、これらはすべて女王の所有となっている。しかし、ローヤル・パークの管理は、1851年の国王所有地法（the Crown Lands Act）及びその後の法に基づいて、環境大臣がその責任を負っている。土地の所有権が女王にあるため、環境大臣は、特別な法律を制定しない限り、土地の売買、賃貸、あるいは建物の建築を行う権限を有していない。

公園の管理は、女王の承認の下に環境大臣が任命する王立公園管理官（the Bailiff of the Royal Parks）の責任である。但し、ハンプトン・コートには独自の管理者がいるため、除かれている。またローヤル・パークの他に、パーラメント・スクエア、ブロンプトン墓地、あるいはタワー・オブ・ロンドン等に付属するオープン・スペースも管理している。



手入れの行き届いたハンプトン・コートの庭園

王立公園管理官は、ローヤル・パークに関する政策、管理、財政の全般にわたる責任を有しており、公園における作業、機械・備品の購入、外部との契約及び許可、公式行事に関する公園利用の許可、公園会計の管理等を行っている。ローヤル・パークの日常的な管理については、それぞれの公園管理官（Park Superintendent）によって実施される。各公園管理官は、1名あるいはそれ以上の副公園管理官及び数名の職員に補佐されて、現場作業部門により管理を実施する。

ローヤル・パーク内の警察業務は、1974年の公園規制（改正）法によって設置され

た王立公園警察 (The Royal Parks Constabulary) が行っている。但し、ハイド・パークはメトロポリタン警察が担当している。したがって、ローヤル・パークの警察業務は、内務省の管轄ではなく、環境省に属している。王立公園警察長官は、王立公園管理官を通して、環境大臣に責任を負う。



ブッシー・パークで絵を描く老人